
～ 生まれた意味を知る物語 ～ 溢れる想い、再会。

lc-hi ✍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゝ生まれた意味を知る物語ゝ溢れる想い、再会。

【Nコード】

N8610E

【作者名】

I c - h i

【あらすじ】

ルークが、ローレライを解放してから二年……ふさぎこんでいたティアがタタル溪谷に行った先には……。ティルズオブジアビスの中のエンディングのアナザーエディションを描いた一作読みきり編。

（前書き）

テイルズオブジァビスの、エンディングのアナザーエディションです。

「ルーク……好き。」

ティアは、ルークがローレライを解放する直前…別れ際に言ったコトバを思いかえした…。

「あの日から、二年が経とうとしている…」

ティアは、ルークが生きていれば20歳になる…なんて事を考えていた。ティアは、今も変わらずにユリアシティでルークを待っている日々を過ごしていた。

そんな時、ティアの部屋に客人が来たと言うのだ。

ジェイドだった。

ジェイドは金髪をなびかせて、いつもの微笑みを浮かべながら部屋に入った。

「大佐！？どうしてこちらに？」

ティアは、突然ジェイドが来たために驚いていた。

ジェイドは、ニコツと笑って眼鏡に手をあてながら言った。

「一応、將軍なのですがね」

「あつ、ごめんなさい……」

ティアは、申し訳なく思ったようだ。

ジェイドは、真剣な表情で言う。

「皮肉ですね、フリングス將軍と、ルークの事が重なったために……私が將軍になるなんて。」

「はい……ルークは、約束しましたよね。帰ってくるって……。」

さすがのジェイドも、ティアに対して何も答えられなかった。

「……………」

ジェイドは、しばらくの沈黙の後に持ち前のお茶目さでティアを和ませようとした。

「ペラペラペラペラペラペラ……ペラペラペラペラ」

「?どうなさいましたか?」

「いえ……口が、止まらなくなりそうになりました。」

「ごめんなさい……気をつかっていただいてしまって。」

ティアはジェイドの気遣いに感謝した。

ジェイドが穏やかな顔つきを見せた。

「かまいませんよ……わたしは。それより、ティアさんがそんなに弱々しいと、私が惚れちゃいますよ。」

いきなりジェイドがまたお茶目な顔つきに戻った。

「ふふっ……」

ティアがようやく笑った。

「呼びにくいから、大佐と呼ばせてもらっわ。何か、ご用があつて、来たのですか?」

ジェイドは、真剣な表情で言う。

「ふん…ご名答。実は……………ルークの成人式が、明日、バチカルで執り行われるようです。それを、お伝えに参りました。」

「そうでしたか……………、ピオニー陛下にも…御礼を言っておいて下さいますか？」

ティアは、ジェイドがピオニーに頼まれて来たと思ってるようだ。

「おや？私は、私の意思でここに来たんですよ……………。ティアさんが、ユリアシティにこもりっぱなしたと、先日、ガイに聞いてですが…。ティアさんにこの事を、ご報告差し上げに参ろうかと…。」

「あ、そうでしたか／＼勘違いしてました……………ありがとうございます！
ますー！」

「ようやく、ティアさんの笑顔を取り戻したんで…そろそろ行きま
すね。」

「あ、はい！いろいろありがとうございました。」

ジェイドは、ティアの部屋をあとにした。

その夜…。

ティアは、辻馬車を使ってタタル溪谷に向かった。そして、ちょうど……ホド諸島が見渡せる高台に向かった。

月光が照らす幻想的な溪谷で、ティアは懐かしい少年の姿を思い浮かべていた……その時……まるで、溪谷の谷の端に、彼が立って居るように見えた……。

（ルーク………／／／）

ティアは、幻覚を見たのだと思い……瞳をとじた……。

そんな時、ティアの背後から魔物が襲いかかってきた…。

魔物は、ソードダンサーのようだが、少し、違って白銀系統の鎧をきていた。

ティアは魔物が迫って来るのに気づいたが、もう遅かった…。

次の瞬間、誰かが瞬速で走ってきて、魔物を斬り倒した。

「伏せてろ……」

赤毛の長髪に、白い見慣れた上着を着て、首には黒いスカーフを巻いていた。

ティアが、言われたとおりに伏せて男をぼんやりと…見つめていた。

ものすごい勢いで立ち上がって男に斬りかかった、ソードダンサーの恐ろしいほどの連続攻撃を防いで、剣から発した閃光でソードダンサーを巻き上げた……。

「で やああああ……!!」

「消えちまいな……! 集え!! 響け!! 全てを滅する刃と、かせ……!!
……くられ! ロスト・フォン・ドライブ!!……!!」

男は、巻き上げたソードダンサーを無数に斬り刻んで、最後にとどめの一撃をぶちこんだ。

ソードダンサーは、消滅した……。

謎の男は、確かにローレライの鍵をもっていて…かつて、見たことのある技を放った。

「ル……………ルーク…？」

ティアは、懐かしい雰囲気をもった男の後ろ姿を見ていたら…ルークと重なって見えた。

その時…ティアの方を向いた、ゆっくりとティアに近寄ってきた。

ティアは、男を見上げた。

「…あ……………！」

男は、ティアの瞳を見つめたまま黙っていた。

「……………。」

ティアに無言で、手を差しのべた。ティアは、男の手をとって立ち上がった。

ティアは、涙を流していた…確かに、ルーク・フォン・ファブレの姿だった。

ルークは、こわばった表情をといて…大人びた優しい微笑みを浮か

べて、優しくおちついた声で言った。

「……ここからなら、ホドがよく見渡せる……それに……約束して
たからな。」

ティアは、ルークに抱きついた。

「……ルーク……!!」

ティアはルークを強く抱きしめた後に、ルークの肩に両手を滑らせて
両肩をしっかりとにぎりしめて……ルークの額に自分の額をあてなが
ら言った。

「……バカ………ルークのバカ……!!」

ルークは、ティアの額に自分の額をあてて、ティアの瞳をじっと見
ながら言った。

「ティアが……俺の生きる意味だ……ティアに出逢ったために生まれた
……」

ティアは、照れながらルークにしか聞こえないような声で言った。

「ルーク……／＼私も、あなたに出逢うためよ……。」

二人は、互いに背中に手をまわしながらキスをした…。

｝ f i n ｝

（後書き）

一作の短編です。

テイルズと言えど、思っアナザーエンディング・エディションを書きました。

ご感想や、要望などありましたらよろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610e/>

～生まれた意味を知る物語～溢れる想い、再会。

2010年10月9日03時47分発行